

委託事業実施内容報告書

令和4年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 【地域日本語教育実践プログラム】

実施内容報告書

団体名： 特定非営利活動法人国際活動市民中心

1. 事業の概要

事業名称	「生活者」のための公的な基礎日本語教育の実践研究事業
日本語教育活動に関する特定のニーズの実情や課題	日本に定住し、耳から日本語を覚えた外国人においては、就職や子育ての中で読み書き学習のニーズが顕在化することが多い。こうしたニーズに対応する基礎的な日本語教育は、一般的な留学生教育とは大きく異なることから、生活者を活動分野とする日本語教師による実践事例が求められていた。自治体の多くが日本語教育の体制づくり推進事業を始める中で、日本語教師が専門職として担うべき「生活者のための日本語教育」の具体的なあり方については議論が少なく、教育内容・方法の研究や成果の発信が日本語教育の推進に向けた課題であった。本事業により、この特定のニーズに応じるための日本語教育の具体的な実践事例とその結果を具体的に示すことができた。今後は、この特定のニーズを理解し対応できる日本語教師の育成と、学習環境の整備が課題である。
事業の目的	本事業は、在留歴が長く日常会話ができるものの、読み書きができない「生活者」のために日本語教師が担うべき公的な基礎日本語教育の方法と内容について提案することを目的とした。社会参加促進のための日本語学習機会をオンラインで提供し、その実践研究の成果報告により、各地の日本語教育体制整備に資することをめざした。
事業内容の概要 (課題をどのように解決したのか、どのような点が先進的な取組であったのか分かるように記載)	●運営委員会の実施（取組１） 「生活者としての外国人」のための日本語教育に知見を持つ有識者を運営委員として、6月、11月、3月に委員会を実施し、助言を得ながら事業運営と評価を行った。 ●日本語教育の実施（取組２） 対象を絞ってオンラインで2コース実施した。「日本語での会話はできるが、読み書きができないので学びたい」という特定のニーズに対応する日本語教育について、到達目標と方向目標を設定し、コースを実施しながら、教育評価に必要なデータを収集した。実践研究の視点をもって各回の日本語教育を実践した結果、学習者が既に持っている口頭能力と対話の力を活かして読み書きの学習を進めることができた。 ●基日本語教育実践研究会の実施（取組５） 「話せるが読み書きを学びたい」という特定のニーズに対応する日本語教育の内容と方法についてモデルを示すため、2コースを担当する5人の日本語指導者兼コーディネーターが実践研究会を持った。研究会では、書字教育および教育評価についてそれぞれ知見を持つ講師の助言を得ながら、目標設定と評価を実施した。教育評価のため

	に、「日本語教育」の学習データや、アンケート、インタビュー、録画記録等を蓄積し、分析、考察を行った。 ●事業報告会の実施（取組３） オンラインで事業報告会を行ったことにより、同様の「特定のニーズ」への対応に課題または関心を持つ日本語教育事業関係者に向けて、広域に本事業の結果を発信できた。報告会においては、取組５「実践研究会」を踏まえてまとめた各コースの日本語教育の成果と今後の課題を発信した。授業録画を用いた報告により、教育の特徴やポイントが感覚を伴って視聴者に伝わった。また、報告会プログラムの中に、書字教育や評価において専門性を持つ講師からの教育評価コメントを織り込んだことにより、他地域にとって参考となる箇所がわかりやすく示された。全体として、事業報告会における発信は、視聴者から高い評価を得た。 【課題をどのように解決したか】 上記４つの取組を有機的に配置、実施した結果、「特定のニーズ」に対応する基礎的な日本語教育の事例を具体的に示すことができた。「読み書き」の学習機会を持つことができていなかった人々に対して、文字学習への心理的なハードルを下げる配慮や、「話すこと・聞くこと」の能力を活用したコース設計と教育実践により、「やってみたら、できると思った」「自信がついた」などの成果があった。また、学習者同士で学習方法について助言しあう、経験を共有する、など、対話的な学習の場づくりによっても継続学習への意欲を引き出すことができた。 【先進性】 CINGAは令和３年度に文化庁の同事業を日本語初学者を対象として実施した。その知見を引き継ぎ、今年度の事業に活かした。また、CINGAは文化庁委託の日本語学習支援者研修カリキュラム開発事業および同プログラム普及事業を合計５年間実施し、全国７地域において生活者に対する日本語教育・学習支援に関わってきた。そのため、市民としての日本語学習支援者と日本語教育の専門性を持つ者の役割分担や協働のあり方を意識しながら、本事業の「特定のニーズ」に応じる日本語教育の実践に臨むことができた。
事業の実施期間	令和４年５月 ～ 令和５年３月 （１１か月間）

事業の実施体制

(1) 運営委員会

実施体制		氏 名	所 属	役 職	専門分野
	1	内藤 真知子	国際日本語普及協会 難民事業本部	元専務理事 元日本語教育監督者	日本語教育
	2	米勢 治子	東海日本語ネットワーク	副代表	日本語教育
	3	式部 絢子	北海道大学 北海道秩父別町	非常勤講師／研究員 多文化交流コーディネーター	日本語教育
	4	萬浪 絵理	国際活動市民中心	日本語教育コーディネーター	日本語教育
	5	西山 陽子	国際活動市民中心	日本語教育コーディネーター	日本語教育

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制



CINGA基礎日本語コース

日本語が話せるが読み書きができない人を対象として週2回、4ヶ月の基礎日本語コースをオンラインで実施



実践研究会の実施

同一の教材を使用して日本語教育を実施する2地域の講師が実践研究会を持ち、分析・評価を行う

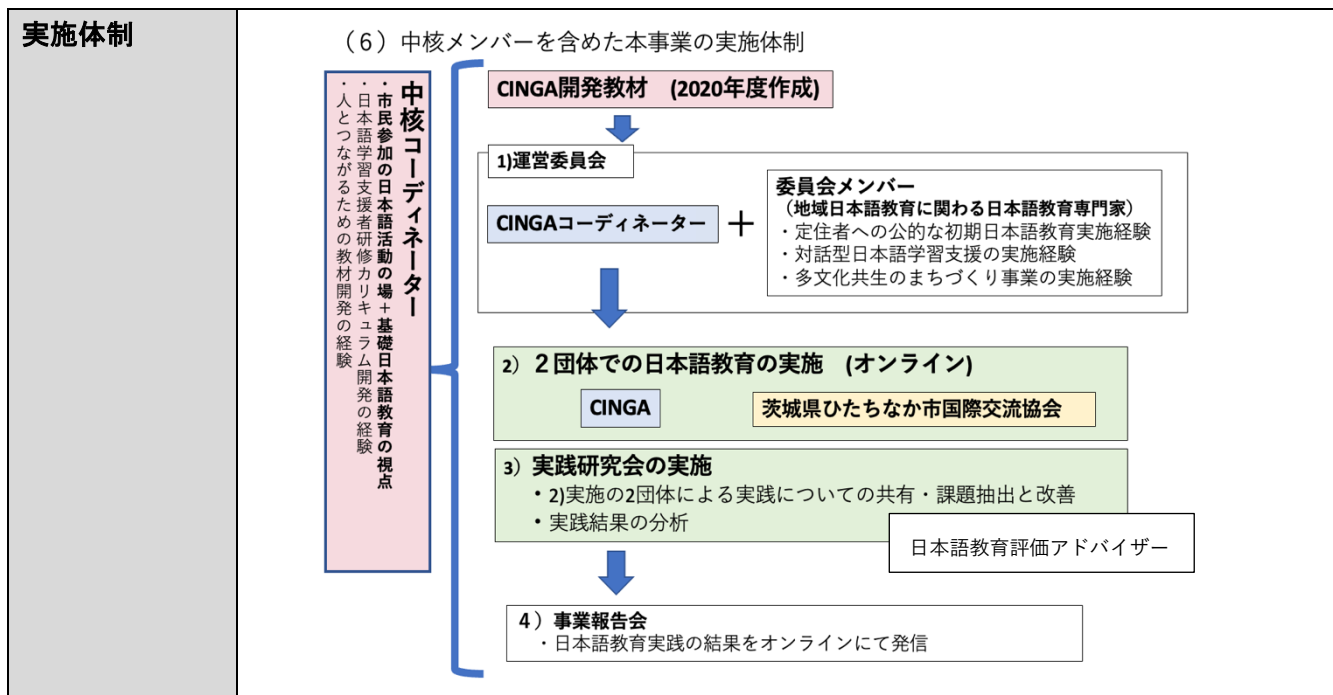


ひたちなか市
国際交流協会
基礎の日本語教室

日本語が話せるが読み書きができない人を対象として週2回、4ヶ月の基礎日本語コースをオンラインで実施

・日本語コースは、2地域で実施し、合同で研究を進めた。報告会をとおして、日本語教育実施地域内外の自治体、国際交流協会、企業、日本語教室等に向けて成果報告し、体制づくりの一助とした。

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制



2. 各取組の報告

特定のニーズに応じた日本語教育の実施 【名称：話せる人の読み書きオンラインコース（CINGA コース）】			
取組の目標	・仮名の読み書きができる/「日本語教育の参照枠」p. 67 の基礎漢字 122 字が読め、意味がわかる。 ・自分の経験や考え・身近な出来事について、口頭で話せていたことを文で書き表すことができるようになる。 ・日常生活の中で自律的に学習を継続するための方法と習慣を獲得する。		
内容	・ひらがな・カタカナ・漢字の読み書き学習を行った。漢字に関しては、書字のルールや、基礎漢字以外にも受講生各自の生活の中で見られる漢字なども取り上げた。 ・手書きだけではなく、スマートフォンやPCなどでの文字入力ができることを目指し、入力方法を説明するとともに、入力の練習も行った。 ・教材「わたしをつたえるにほんご」を使い、本文読みや再話などの練習を取り入れ、自分が得た情報を整理して人に伝えたり、自分のことを書いて伝える能力の養成を行った。		
実施期間	令和4年7月26日 から 令和4年12月20日 まで	授業時間 ・コマ数	1回 2時間 × 36回 = 72 時間
対象者	話すこと・聞くことはできる が読み書きができない外国人 等	参加者	総数 8 人 (受講者6人、指導者・支援者等2人)
カリキュラム活用	0101 適切な医療機関の選択をする 0101100 診療科の看板を確認する 0102 問診票に記入する 0102030 問診項目を理解する 0102060 名前を記入する 0102070 住所を記入する 0203 薬の説明を理解し、適切に利用する 0203080 説明書きの「効能、用法、注意」を理解する 0501 避難場所・方法を確認する 0501010 地域の公的機関で発行している外国人対象の生活情報パンフレット等で確認し理解する 0503 台風発生時に適切に行動する 0503020 天気予報・台風情報に留意し理解する		

	0504 火災発生時に適切に行動する
	0504010 火災報知器・探知機について理解する
	1003 行き先・停留所を確認する
	1003010 駅名や停留所名を理解する
	2001 小・中・高等学校で教育を受けさせる
	2001010 学校制度について理解する
	2002 学校行事に参加する
	2002010 学校行事について理解する・あることを知る
	2302 給与明細について理解する
	2302010 給与明細の見方を理解する
	3201 異文化コミュニケーションについて理解する
	3201010 文化の相違とは何かについて理解する
	3201030 自分自身の文化と日本の文化を比較する
	3201040 自分の文化を説明する
	3201080 自分や周囲の人の体験から理解する
	3202 異文化摩擦事例について理解する
	3202030 摩擦の原因を考える
	3202050 自分や周囲の人の体験から理解する
	3202090 自国の習慣について説明する
	3501 自治会行事に参加・協力する
	35011170 訃報、断水、停電、道路工事、子供会の行事等のお知らせを読む
	3801 目標を設定する
	3801050 自らの目標を考える
	3901 学習機会を利用する
	3901040 自らに必要な学習方法について理解する
	3901110 学習方法について適当な人に質問する
	4001 学習目標を設定する
	4002010 目標とそれを達成するための方法・手段について考える
	4002020 学習計画を立てる
	4002030 学習する

	4002050 学習の進捗状況を評価する
	4101 辞書や教材を利用する
	4101030 学習に必要な辞書や教材を入手する
	4101060 同僚等と共同学習をする
	4101070 経験者や指導者に尋ねる
	4101080 分からないことを聞く
	4102 日常生活の中で学習する
	4102010 学習の方法を身につける
	4102030 日常生活での学習方法を理解する
	4102040 適宜学習したことをモニターし進捗状況を把握する
	4102050 周囲の人の学習状況を観察し参考にする
	4102060 学習の仲間を作る
	4102100 知らない言葉・表現をメモする
	4102110 学習成果を自己評価する
	4102120 評価を学習にフィードバックする
	4103 コンピューターを活用し自学自習する
	4103010 コンピューターの使用方法を理解する
	4103030 周囲の人の学習状況を観察し参考にする
	4103050 自学自習のためのコンピューターリテラシーを身につける
	4201 辞書や教材を利用する
	4201040 利用方法を理解する
	4201080 経験者や指導者に尋ねる
	4201090 同僚等と共同学習をする
	4201100 分からないことを聞く
	4202 日常生活の中で日本語を学習する
	4202010 日常生活での学習方法を理解する
	4202020 日常生活での学習方法を適当な人に尋ねる
	4202030 周囲の人の学習状況を観察し参考にする
	4202040 学習事項を直接見聞きする機会を意識する
	4202050 学習時間を計画する
	4202060 日常生活で意図的に学習を進める
	4202070 日本語教室や交流イベントの情報収集する
	4202100 学習方法を身につける
	4202110 学習の仲間を作る
	4202120 適宜学習したことをモニターし進捗状況を把握する

	4202130 学習成果を自己評価する 4202140 評価を学習にフィードバックする 4301 日本について理解する 4301010 自分や周囲の人の体験から理解する 4301040 本や資料を読んで知る 4302 社会問題について理解する 4302040 テレビや新聞などから学ぶ 4302090 自分や周囲の人の体験から理解する 4401 外出や余暇の計画を立てる 4401020 計画を立てるための情報を入手する 4401050 時期や日程、予算など物理的な条件と自らの嗜好などを勘案し可能な方法を選択する 4401060 同僚や周囲の人に相談する 4603 電子メールを利用する 4603030 パソコンメールを利用する 4603080 日本語入力に慣れる 4603090 電子メールを書く 4603110 日本語で利用する 4603120 携帯メールを利用する 4801 新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・インターネットから情報を収集する 4801050 新聞・雑誌・テレビ・ラジオ・インターネットから情報を収集する方法を理解するほか									
使用した教材・リソース	CINGA『わたしをつたえるにほんご』1、2 文化庁（2016）『社会参加のための日本語通信講座』「ひらがなワークブック」、「カタカナワークブック」 文化庁（2017）『社会参加のための日本語通信講座』本冊 令和3年10月12日 文化審議会国語分科会「日本語教育の参照枠 報告」p. 68									
受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	ミャンマー	イラン	ギニア							
	4	1	1							

取組事例①

【第3回 令和4年8月2日】

＜ローマ字入力練習＞

挨拶「こんばんは」「きょうはあついですね」などをチャットボックスに入力する練習をした。発音がそのままローマ字表記になっている人もいた。ローマ字入力の練習をする中で「あつい」の「い」の数を確認する場面もあった。50音表を見ながら拗音・長音の入力方法を確認した。

＜ひらがな＞

読み練習。全員、個別で練習。ゆっくり読むだけでなく、できるだけ速く読むようにも練習。

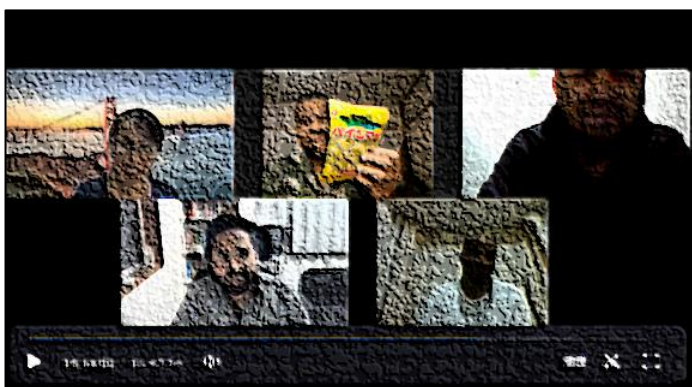
拗音・長音の読み練習、拗音・長音を含む語彙を使つての文作り。「免許を取るのは難しい」、「市役所に住民票を取りに行く」など普段の生活に即した文が作られた。

＜カタカナ＞

ア～タ行導入。家の中にある物で、カタカナが書いてあるものを持ち寄って読み練習をした。

＜クラスの様子＞

間違えることに少し抵抗があり、「できない」と口にすることが多く見られる参加者もいた。できていない部分は一緒に確認したり、応援しながら進めるようにしたところ、間違えた部分をもう一度入力するようになった。



取組事例②

【第30回 令和4年11月25日】

＜作文添削＞

宿題として提出された「仕事」についての作文（U.14）を添削した。添削が必要な部分にハイライトしたものを提示し、どのように修正するかを考えてもらいながら添削した。

＜復習＞

漢字 3-22 の漢字語彙の読み方を復習した。聞いたことのある語彙と提出される語彙とが同じかどうかなどを確認することが多い。また、漢字テキスト内の「人生コラム」を復習として読んだ。

＜漢字＞

漢字 3-24 の各漢字の構成と読み方、漢字語彙、書き方を確認した。漢字がどのように構成されているかにも注目できるようになってきた。新出漢字は本日で終了したので、今後は学んだ漢字を部首毎にまとめたり、部首の意味を確認するなどして復習していくことを伝えた。

<コラム>

漢字テキスト内の「ミャンマー出身家族の話」を黙読後、内容確認として1人に再話してもらった。全員が内容を把握したのち、コラム内容についてディスカッションをした。

<メインテキスト本文>

U.18 アンさんの話（継承語問題）の動画を見て、内容を理解した後、各自の経験を話した。継承語の問題だけでなく、自国と日本の文化が違うことで困った経験などについても様々なエピソードが出てきた。

<クラスの様子>

「ミャンマー出身家族の話」では、コラムの内容についてのそれぞれの考えを述べていた。クラスメイトの発言から、教師も他のクラスメイトも自身がコラムに対して抱いた認識が変わる場面もあった。



★（２）成果と（３）課題は、ひたちなかコースのあとに記述

特定のニーズに応じた日本語教育の実施											
【名称：話せる人の読み書きオンラインコース（ひたちなかコース）】											
取組の目標		CINGA コース同様									
内容		CINGA コース同様									
実施期間		令和４年７月２６日 から 令和４年１２月２０日 まで			授業時間 ・コマ数		１回　２時間　×　３６　回＝　７２　時間				
対象者		話すこと・聞くことはできるが 読み書きができない外国人等			参加者		総数　８　人 (受講者５人、指導者・支援者等３人)				
カリキュラム活用		CINGA コース同様									
使用した教材・リソース		CINGA『わたしをつたえるにほんご』１、２ 文化庁（２０１６）『社会参加のための日本語通信講座』『ひらがなワークブック』、「カタカナワークブック」 文化庁（２０１７）『社会参加のための日本語通信講座』本冊 令和３年１０月１２日　文化審議会国語分科会「日本語教育の参照枠　報告」p.68									
受講者の出身（ルーツ）・国別内		中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
		1			1		2				

訳（人）	その他 ドミニカ共和国 1名
------	----------------

（１）特徴的な活動風景（２～３回分）

取組事例①

【第５回 令和４年８月９日】

・宿題の答え合わせ、ひらがな・カタカナの復習、簡単な漢字の学習をした後、「わたしをつたえるにほんご」U7を学習した。

・U7のテーマである「地域の活動」について、日本での経験を話した後、「盆おどり」「ゴミ拾い」「ボランティア」などのことばについても確認した。

〈再話と文字入力練習〉

・「みんなのはなし」の登場人物の一人、アンさんの話の動画視聴を２回した後、どんな話だったか内容を各自考えて、チャットに文字入力をした。チャットに入力されたものもパワーポイント上にコピーして、全員で確認した（写真左）。その後教師が表記上の間違いなどを修正した。

〈読みの練習と内容確認・質問文の入力の練習〉

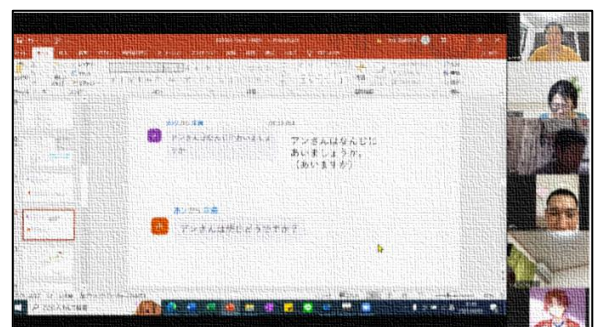
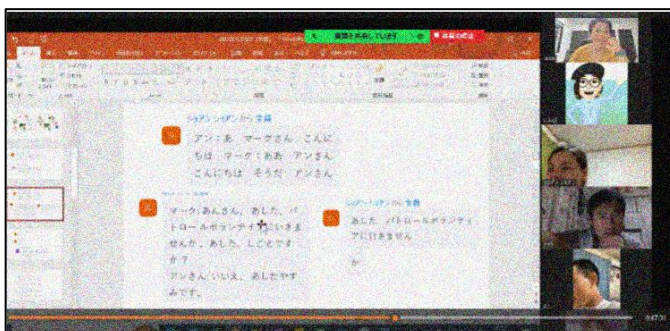
・アンさんの話の本文の読みの練習をリピートと音読で行った後、質問文を考えて、チャットに入力した。入力された文を元に口頭で質問→答えを順番に行った。（写真右）最後にシャドーイングの練習を行った。

〈授業の様子〉

・この回までにローマ字入力の方法などは学習済であったが、この回でもまだタイピングには時間がかかり、綴りの間違い、特にカタカナでの入力間違いが目立った。漢字はほとんど使用されていない。

・再話のやり方を理解できていない学習者や、話をまとめられずにテキストを読み上げてしまう学習者もいた。

・このころには学習者同士、打ち解けてきた様子が見られ、和気あいあいとQAをしている様子が見られるようになった。



取組事例②

【第８回 令和４年８月３０日（火）】

〈生活の中の漢字〉

・宿題（自分の生活の中で、読めない漢字の写真を撮って送る。）の中から２枚を取り上げ、漢字の意味を説明した。（写真左）

〈漢字の練習〉

・簡単な漢字についての形、読み方、意味、書き順、書く練習をした。その後漢字交じりの短文を読む

練習もした。

〈「U8 ナムさんの話の復習、QA の練習」

・「仕事」についての話を各自の話に広げて行った。子どものときになりたかった仕事について話し合った。その後本文の音読をした。

〈作文〉

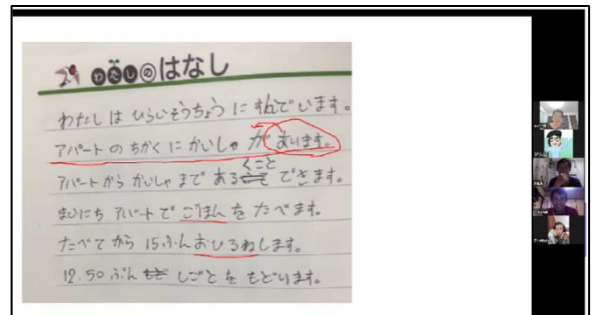
・宿題「わたしのはなし」を取り上げて、他の人の作文を読み、聞いている人は質問をした。その後、講師から誤用を指摘して、全員で修正を考えた。(写真右)

〈クラスの様子〉

・この回で取り上げた「生活の中の漢字」は、いつも目にしていたが意味が分からない社内の張り紙である。この講座で初めて意味が分かったとのことだった。張り紙の意味が分からなかったので、張り紙の内容とちがうことをしていたと苦笑していた。(写真左)

・この回あたりから、読みの能力の差がみられるようになってきた。ひらがなだけはすらすらと読めるようになった人、簡単な漢字交じりの文が読めるようになってきた人、ひらがなならゆっくりと、カタカナはまだ読めない人などである。

取組事例③



【第18回 令和4年12月15日(木)】

〈再話の練習〉

・U16の登場人物(アンさん、リンさん)の動画視聴をした後、再話の練習をした。再話のときによく使う表現のいくつかを提示して、各自が口頭でいう再話を講師がPPTに入力し、修正部分を一緒に考えた。

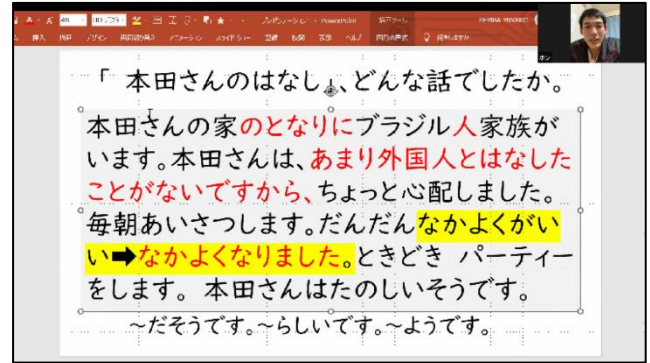
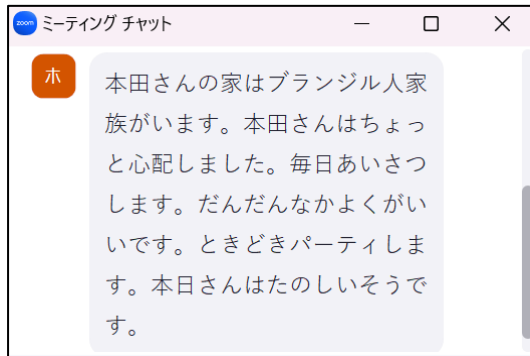
・本多さんの動画視聴した後、実際に再話を考えて、チャットに入力をした。(写真左) 入力した文字をPPTに移して、添削した。(写真右)

〈漢字の復習〉

・U15を使って、ルビなし文の読みの練習をした後、その中に出てきた「将来、夢、祖母、祖父、残業」についての漢字の字形の特徴や、読み方意味を復習した。その後これらのことばにまつわる話をし、例文を作った。

〈授業の様子〉

・再話の練習で、自分が作った再話文を読み返し、正しい文の直すことはできなかったが、間違っていると自身で見つけていた。このころには、全員ではないが一部の学習者には、入力に抵抗がなくなり、文の量も増え、漢字使用も増えてきた。



★下記（２）と（３）は CINGA コース、ひたちなかコースを併せた記述

（２）目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

本コースに申し込みをした人のうち、コースの最後まで参加した人は CINGA コースでは 6 人中 6 人で、出席率は平均 89% だった。また、ひたちなかコースでは 5 人中 3 人が最後まで参加し、出席率は平均 54% だった。うち 1 人は 80% 以上の出席率だった。

読み書きを学びたいと思いつつも学習の場が得られず学習できない層に対し、継続できる学習の機会を提供することができたと言える。また、到達目標と方向目標に対する成果については以下のとおり。

【到達目標】

「生活に身近な漢字 120 を含む文字の理解」については、伸びは個人差が大きかったが、達成した人もいた。「すでに話せる内容を文章で表現する力の獲得」については、書くことは実は必要度が低かったため、途中でコースの方針を転換した。「すでに話せる内容を、情報を整理して関連付けながら表現する力の獲得」については、成果があったと話す人もいた。また、獲得には至らずとも、自分の課題だと認識した人が複数いた。

【方向目標】

「生活の中の文字情報から必要な情報を得ようとする姿勢、自分の考えを文字で発信しようとする姿勢」については、当事者の意識、行動から、情報を得ようとする姿勢は多く見られたと言える。

「継続的・自律的に学習する姿勢」については、出席率や、当事者の意識、行動から、大いに見られたと言える。

（３）今後の改善点について

課題としては、学習環境の整備が挙げられる。今回、ひたちなかコースの学習者は、学習意欲を持ち、学習を希望しつつもおかれた労働環境により、学習の継続ができなかった人もいた。学習環境の整備は、学習者本人のみではどうにもできない部分もあり、学習者の職場や周囲（社会）の理解が欠かせない。この点を鑑み、学習の重要性を学習者本人のみならず、学習者の周囲への理解を訴えていくことが必要だということがわかった。また、オンライン学習は学習の場を求める人にとっての一助となりえるが、対面での学習を希望する声もあった。オンラインと対面の双方を活用し、学習の場の選択ができること、学習の機会を増やすことが今後の課題となる。

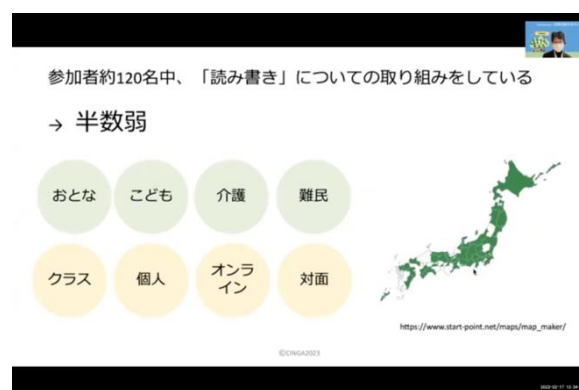
取組の成果の発信や普及及び住民の日本語教育への理解の促進										
【名称：事業報告会】										
取組の目標		日本語教師が行う公的な基礎日本語教育の設計と方法についての重要性を全国の自治体や国際交流協会に向けて発信・啓発する。								
内容		取組 2 による日本語教育実践の結果を取組 5 において分析・考察した結果をまとめ、オンライン (zoom) で報告を行った。 1. 事業報告（趣旨、概要、各コース実施報告、R3, 4 から見えたこと） 2. 講師による事業報告へのコメント 3. 質疑応答								
実施期間	令和 5 年 2 月 1 7 日			授業時間 ・ コマ数		1 回 2.5 時間 × 1 回				
対象者	対象：生活者のための日本語教育事業を実施中、または実施予定の地域の行政担当者、国際交流協会、総括コーディネーター、地域日本語教育コーディネーター、日本語教師、地域日本語教育の推進に関わる有識者等			参加者		総数 90 人				
カリキュラム案活用	なし									
使用した教材・リソース	スライド資料									
受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	把握なし									

（１） 特徴的な活動風景

取組事例①

【令和 5 年 2 月 17 日】
1. 事業趣旨に続き、日本語教育の目的と内容を説明した。具体的な様子が伝わるよう、授業の録画を編集し、学習活動の種類を 15 分間のダイジェストにまとめて共有した。

2. ひたちなかコース、CINGA コース、それぞれの結果を報告した。コースにおいて、「読み書き」の学習を通して自分のことを考え、話し、相手の話を聴き、そしてまた考える」ことが重要であったため、そのことが表れている場面の録画を共有した。
3. 本事業実践研究会の講師である新矢麻紀子氏が生活者の書字教育の論点を含めて講義とコメントを行った。生活者の中には、日本語が流暢に話せても読み書き能力が十分ではないことで自己不全感を持つ人々が多いという課題が研究者の視点から提示された。また、地域には、これら特定のニーズに対応できる日本語学習の場が少ないという課題や、学習によって単にリテラシーが向上するばかりでなく、多面的な効果があることが、本事業報告や他機関での実践結果を併せて話された。
4. 対象の異なる R3, 4 の日本語教育の実践から見えたことを報告した後、日本語教育の評価について本事業アドバイザーの宇佐美洋氏が事業報告へのコメントを行った。日本語教育実践そのものに対しては、学習者が持つ既存の能力（R3 は「話す力」）を活かして読み書き学習が行われたこと、また、参加者同士の「協働」によって学習を促進していたことが評価された。日本語教育実践の「見せ方」については、実践研究データである授業録画を活用して、日本語教育の効果をわかりやすく視覚的に視聴者に提示したことが評価された。この「見せ方」は、報告会視聴者が各地の実践において成果普及を図る際にも参考になることが伝えられた。
5. 質疑応答
講師から、「評価」における「間主観性」の重要性について説明があった。また、can-do 至上主義に陥らず、「できる」ようになるためには何が必要であるか、本質に目を向けて日本語教育の目的や目標を定め、評価することが求められる、とのコメントがあった。本事業の日本語教育においてキーワードとなった「対話」についても、対話自体を目的化せず、対話を通して何をを目指すのかが重要との指摘があった。



(2) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

- ・ 報告会アンケート結果によれば、「「生活者としての外国人」のための日本語教育について理解が深まりましたか」という問いに対し、98%が「深まった」または「まあまあ深まった」と回答した。また、自身の実践の場を考えていく上で参考になる点が「大いにあった」「あった」の回答が合計 96%であった。よかった点として、「学習目標や結果報告等概要に加え、実際教室の様子が見られたことでより具体的

に活動内容が見えた」など、授業録画を共有したことに対する評価が非常に多く挙げた。

- ・ 専門分野の異なる講師2名のコメントによって、実践のポイントが視聴者にわかりやすく伝わったばかりでなく、この報告会自体が実践に対する対話的な「評価」の場であることが伝わった。
- ・ 「自身の実践に反映させたい点が多々あった」「教師の対話実践、同僚性をつくるところから始めたい」「プログラムの活動、成果を第3者に共有する形で計画してこなかったことを反省した」などのコメントから、報告会参加者の今後の行動の変化につながる成果普及となったと言える。報告会の事前アンケートによれば、生活者のための読み書き教育を実施している人は半数弱であったが、この報告会が「特定のニーズ」に対する効果的な実践が普及していく1つのきっかけとなるのではないかと考えられる。

(3) 今後の改善点について

報告会の実施について、特に改善を要する点はなかった。話せる人の読み書き学習という「特定のニーズ」に応じた日本語教育を普及させるにあたって、本事業報告会視聴者には実践の成果がわかりやすく伝わったと考えられる。さらなる成果普及のために、今回の事業報告会の録画データやアンケート結果を有効に活用していきたい。

任意の取組

【取組名：基礎日本語教育実践研究会の実施】

取組の目標	読み書き学習を必要とする学習者に対する日本語教育の教育内容と方法について提案するための根拠となる記録や学習データを残すこと
内容	研究会は年度内に5回、実践開始前2回／中間1回／終了後2回、オンラインで開催した。 各回の内容： ●第1回(6/2) 生活者に対する読み書き教育の内容と方法について、新矢麻紀子講師から講義と質疑応答による助言を受けた。 ●第2回(6/17) 日本語教育の目標設定について検討し、宇佐美洋アドバイザーから助言を受けて評価指標を決めた。 ●第3回(10/15) 両コースの中間報告を行い、コース後半に向けて評価の観点を確認した。学習者へのアンケートやインタビュー等、評価ツールを作成した。 ●第4回(1/13) 両コースの最終評価の方法について検討を行った。 ●第5回(1/26) 両コースのデータ分析の結果と考察を共有し、成果の発信に向けて宇佐美洋アドバイザーから助言を受けた。

実施期間	令和4年6月2日 から 令和5年1月26日 まで			授業時間 ・コマ数	1回 2時間 × 5回 = 10時間					
対象者	CINGA コース、ひたちなかコ ース コーディネーター			参加者	総数 7人 (講師2人、参加者5人)					
カリキュラム 案活用										
使用した教 材・リソース										
受講者の出身 (ルーツ)・ 国別内訳 (人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパー ル	タイ	インド ネシア	ペルー	フィリ ピン	日本
										5

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【第1回 令和4年6月2日】

講師により、下記項目や講師所属団体の考え方や実践についての講義を受けた。その後、本事業で実施するコースの進め方について講師に説明しアドバイスを頂くとともに、生活者を対象とした読み書きの学習についての疑問点などについての質疑を行なった。

<講師による講義>

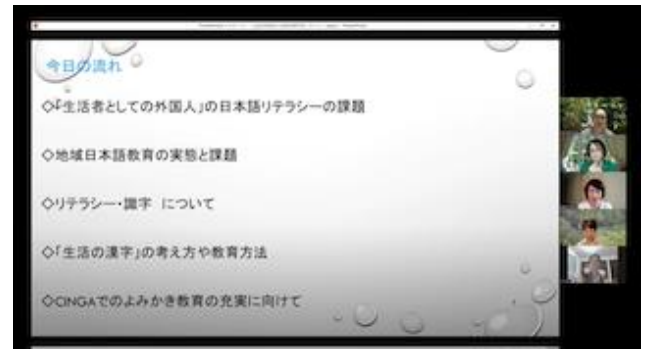
- ・「生活者としての外国人」の日本語リテラシーの課題について
- ・リテラシーの欠如による影響について
- ・地域日本語教育の実態と課題について
- ・リテラシーとは
- ・「日本語教育の参照枠」における漢字について
- ・リテラシーの獲得やその教育の意義とは

<講師の実践について>

- ・「「生活の漢字」の会」が大切にしてきたこと
- ・実践内容

<GINGAの読み書きコースの進め方についての相談>

- ・たたき台についての説明
- ・質疑



取組事例②

【第2回 令和4年6月17日】

昨年度事業と今年度事業の対象の相違点や、予想される学習者の属性や課題についてなどを講師に説明した後、今年度の目標設定をするにあたってどのような点に注意すればいいかなどについての意見を伺い、意見交換をした。また、話し言葉と書き言葉の違いをふまえた上で、学習活動の中で注目していく点についてのアドバイスを頂いた。

<今年度事業の説明>

- ・ 事業の目的について
- ・ R4 対象学習者について
- ・ R3 と R4 の目標、対象、方法について

<講師とのディスカッション、講師からのアドバイジング>

- ・ 話し言葉と書き言葉の違い
- ・ 属性による目標設定の違いについて
- ・ 日々の活動の記録、書くことによる学習の振り返りについて
- ・ コース実施の際の注目すべき点について
- ・ 変化のきざしの捉え方について



(2) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

本取り組みにおける新矢講師による講義やアドバイジングにより、「特定のニーズ」に対応するためのコース実施の際、生活者である学習者に対して無理なく受け入れられやすい漢字学習の方法を提示することができた。また、それにより、学習者は漢字学習を難しいものではなく、やればできるものだという達成感を持ちコースを終えることができた。また、宇佐美講師のアドバイジングにより、今年度の目標設定や、評価指標のための注目点を明確にすることができた。両コースは、これらをふまえて目標に照らし合わせた現状を共有し、課題点について議論しながら進めることができた。

この取組により、読み書きの学習を望む学習者に対して効果的なオンラインコースを実施するという点、また、実施した実践を他者に報告するという点で、「特定のニーズ」の充足目標を達成した。

(3) 今後の改善点について

基礎日本語教育実践研究会の内容については特に改善点はなかったが、あえて改善点を挙げるとすれば、回数をもう少し増やし、両コースの講師が実践内容について共有する時間を増やせるとよかった。しかしながら、実際にはコース実施中にこれらの時間を作ることは難しかった。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

本事業は、在留歴が長く日常会話ができるものの、読み書きができない「生活者」のために日本語教師が担うべき公的な基礎日本語教育の方法と内容について、実践研究をとおして提案することを目的とする。社会参加促進のための日本語学習機会をオンラインで提供する実践研究の成果報告により、各地の日本語教育体制整備に資することをめざす。

(2) 特定のニーズの充足に向けて試行した方法

1. カリキュラム策定

到達目標と方向目標を以下のように設定した。

到達目標：

- ・生活に身近な漢字１２０を含む文字の理解
- ・すでに話せる内容を文章で表現する力の獲得
- ・すでに話せる内容を、情報を整理して、関連付けながら表現する力の獲得

方向目標：

- ・生活の中の文字情報から必要な情報を得ようとする姿勢、自分の考えを文字で発信しようとする姿勢
- ・継続的・自律的に学習する姿勢

長年、読み書き学習の必要性を感じつつも後回しになっていた学習者が多いことに鑑み、学習の心理的なハードルが下がるように学習進度や活動内容を工夫した。また、カリキュラムは学習者の状況に応じて随時見直した。

2. 環境設定

- ・ 仕事が終わってから参加できるよう、授業は夜の時間帯に設定した。

3. 教材と学習方法

- ・ 学習者が既に持っている会話の能力を活かして読み書き学習を行うため、ストーリーの音声を手がかりにして文字が学べる教材を用い、学習活動を行った。
- ・ 産出については、文字の形を正確に覚える負担が少ないタイプ入力を早期に紹介した。

4. 対話と協働による学習

- ・ 学習を通して個々の学習環境や生活における学習の意義を協働で考えることにより、コース終了後の継続学習につながるよう配慮した。
- ・ 学習者同士で学習上の課題共有やその解決に向けた助言が生まれるよう、留意した。
- ・ 学習者は長年、就労や家族生活等、日本で多様な経験をしてきた社会人であることを尊重し、クラスにおいて生活上のさまざまな出来事や課題を対話的に考える時間になるよう図った。

(3) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

検証方法：

授業記録、録画、作文等の成果物、テスト、アンケート、インタビュー結果をデータとして、学習者の行動、意識、波及効果を分析し、実践研究会の講師とともに日本語教育の到達目標と方向目標に対する評価と考察を行った。また、運営委員から各取組に対する評価を得た。

到達目標に対する成果：

- ・ 生活に身近な漢字 120 を含む文字の理解
→ 初期能力に幅があり、伸びの個人差も大きかった。伸びが大きかった学習者では、読める漢字が開始時 6 語から終了時 54 語へと増加した（全部で 58 語）。
- ・ すでに話せる内容を文章で表現する力の獲得
→ 開始時は「書けるようになりたい」という希望が多く聞かれたが、実際は文章を書く必要性が低い人が多く、書く練習は時間をかけないように中盤に方針転換した。
- ・ すでに話せる内容を、情報を整理して関連付けながら表現する力の獲得

→ 開始時に発話能力が相当程度ある学習者であり、コース学習を通して「話し方」にはさほど大きな変化は認められなかった。しかし、「話すときに相手に伝わるように文を組み立てることが難しい」といった自己分析が複数名からあがるなど、日本語学習を通して自身の課題を認識し、参加者同士で助言をしながら解決策を模索する姿勢が見られた。

方向目標に対する成果：

- ・ 生活の中の文字情報から必要な情報を得ようとする姿勢、自分の考えを文字で発信しようとする姿勢

→ 「以前は日本語で書いてあるものは読めないので見ようとしていなかったが、今は、見るようになった」などのインタビューコメントから、「読むこと」についての姿勢は大いに变化した。「書くこと」については、「奥さんに任せないで自分の名前や住所を自分で書くようになった」などの変化が生まれた。

- ・ 継続的・自律的に学習する姿勢

→ 隙間時間に取り組める教材により、読む練習への主体的な取り組みが見られた。また、読み書きの心理的なハードルが下がるよう、無理のない学習進度を心がけた結果、「読み書きは難しいと思っていたが、やればできるという気持ちになった」といった継続学習につながる変化が生まれた。

本事業で実施した日本語教育の成果を実践研究によって明らかにし、同様の特定のニーズに応じるための日本語教育の効果的な方法と課題を事業報告会において発信した。

運営委員による事業評価抜粋：

- ・ 事業全体の統合とそのコーディネートが非常によくできていると感じた。それは、その前提となるデザインを描く段階から十分考えられてこそだと思う。
- ・ 経験豊富な年齢層であるという背景をしっかりと考慮していた点が「生活者のための」という大きな対象に適していた。
- ・ GINGA コースとひたちなかコースの2コースが、共通の目的と方向性をもって開講できたことが良かった。両方から共通の考察が生まれたことで説得力が増した。
- ・ 日本語教育の実施に対する評価は、プログラムの実施に対するものだけでなく、むしろ学習者のおかれた状況と、それへの柔軟な対応力に依存した後行シラバスとしての実践の評価である。
- ・ 有識者を、実践者・研究のものだけではなく、報告会でもコメントいただく形で活用したことは、報告会参加者（つまり未来の地域の実践者）にとっても、非常に有益だった。この実践研究が、実践者のものではなく、社会に開かれたものであることの表れだろうと思う。

（４）地域の関係者との連携による効果、成果等

CINGA コースは、地域を限定せずに実施できるオンライン授業の利点を活かして行ったため、学習者が所属する地域関係者との連携は行っていない。並行して地域密着の日本語教育事例を実践研究するため、ひたちなか市国際交流協会と連携した。ひたちなか市国際交流協会は、茨城県内を広報対象としてひたちなかコースを実施した。ひたちなかコースについては、波及効果測定のため、学習者が働いている企業へのインタビュー等で協力を得た。

（５）事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

日本語教育の周知・広報：

全国の自治体、国際交流協会等、日本語教育事業実施団体に対して、文化庁をとおしてメールで広報し、学習者募集の周知を行った。また、外国人支援や多文化共生関係のメーリングリスト等でも広報を行った。（しかし、３週間の広報期間にあった応募は、CINGA コース、ひたちなかコースを併せて１２名に留まった。特に読み書きに関しては、文字を介して学習機会の情報が行き届くことが期待できないため、今後も広報の方法は課題である）。

事業成果の地域への発信等：

CINGA は中間支援組織として、基礎日本語教育を実施したい自治体や国際交流協会に対して本事業の報告会録画を活用した相談会を実施する予定である。

（６）改善点、今後の課題について

以下の運営委員コメントにあるように、本事業を他地域に具体的にどう成果普及していけるかが課題である。短期的には、今年度の事業報告会の録画や資料を活用したい。本成果を活かした日本語教育実施の普及に向けては、実践者のネットワークづくり、自治体や国際交流協会等に対する相談対応、教師育成等が課題である。

運営委員コメント：

- ・ 報告会アンケートの満足度も高く、内容の充実を評価する声も多かったことから、実践研究が有益であったことがわかる。これから求められる地域日本語教育に関わる人材育成という点でも成果、掘り起こし、研鑽などの効果があったのではないかと感じた。各地の体制整備に資するための事業であるという点については、基礎日本語を自治体の主導（多文化共生のまちづくり）で行うことについて、今後ますます明確な説明が求められる。個々人の成果がどこにあるのか、生活者への日本語教育では何が求められているのかなどを見せていくことが必要だと思う。報告会ではそこが見せられていた。
- ・ 報告会への参加が参加者にとっての大きな学びだったのだと実感した。ここで心を動かされた人間がつながり、共感の輪が広がっていくことで、少しずつでも地域日本語教育がめざす方向に向かっていくための力になるのではないかと感じた。新たな「つながりと共感の輪」を拓くことが次の課題である。